

現代日本の階層構造の社会空間的布置

——2015年「社会階層と社会移動に関する全国調査」データを用いた分析から——

○中京大学 堀兼大朗
中京大学 相澤真一

1 目的

本報告では、報告者をふくむ5名の研究者が翻訳作業を進めてきた『文化、階級、卓越化』(Bennett et al. 2009)の知見に依拠しながら、現代日本社会においてP・ブルデューの関係論的社会階級論(Weininger, 2005)の視点にたつ分析の可能性を探究することを目的とする。ここから、近年、イギリスで調査や応用の試みられているブルデューを用いた調査研究アプローチが、どのように日本社会に適用できるのか、また、日本社会にどのような分断線を見出すことができるのかを検討する。これまで、日本で応用されてきたブルデュー研究を一望したAizawa & Iso (2016)では、学校教育が果たす平等化装置の役割とそのなかで培われてきた「国家貴族」ならぬ「国家平民」の形成がマスとして見出されることが明らかにされてきた(Aizawa & Iso, 2016)。このあり方に経験的な説明を加えた近藤(2011)では、経済資本による説明の力の高さが主に見出されてきた。これらの点について、最新の社会調査を用いた分析では、どのような分析となるかをポスターセッションの特徴を生かしたグラフィカルな分析を用いて提示する。

2 方法

データとして用いたのは、2015年「社会階層と社会移動に関する全国調査」(SSM調査)である。本調査は20歳から79歳の日本国籍を持つ男女に対して実施し、有効回収数は7817票、有効回収率は50.1%であった。これまでのSSM調査同様に、職歴に関する情報が充実しているほか、15歳時の経済状況や現在の文化活動なども多様に尋ねており、これらの変数を分析に投入した。分析は基本的にSPSSを用いて、まずはクロス表による確認を行い、その上で、多重対応分析を用いた社会空間的配置を試みた。なお、分析に当たり、データの使用許可は、2015年社会階層と社会移動調査研究会から得ている。

3 結果

分析の結果、2015年のデータからも経済資本による一定程度の高さの説明力が見出された。また一方で、文化資本による説明可能性も示唆される結果が見出された。

4 結論

さらに踏み込んだ結論については、当日のポスター資料に基づいた報告で説明を通じて、提示する。

文献

- Aizawa, S., Iso, N. (2016). The Principle of Differentiation in Japanese Society and International Knowledge Transfer between Bourdieu and Japan, In: Robbins, D. (ed.) *Anthem Companion to Pierre Bourdieu*. Anthem Press, London, pp. 179-200.
- Bennett, T., et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, London: Routledge. (磯直樹ほかにより、青弓社から邦訳を近刊予定)
- 近藤博之, 2011, 「社会空間の構造と相同性仮説--日本のデータによるブルデュー理論の検証」『理論と方法』26(1): 161-177.
- Weininger, Elliot, 2005, 'Foundations of Pierre Bourdieu's Class Analysis', Wright, E., eds, *Approaches to Class Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press: 82-118.